

III 中学部の研究

目 次

1. 体育の意義	33
2. テーマ設定の理由	33
(1) これまでの取り組み	
(2) 生徒の実態	
(3) 中学部における体育の考え方	
3. 研究の実際	36
(1) テーマのとらえ方	
(2) 題材の設定と内容について	
(3) 素材を生かした題材一覧表	
(4) 帯時間と単位時間における体育指導の位置づけ	
4. 実践Ⅰ 「ボール運動」の指導を通して	41
5. 実践Ⅱ 帯時間の指導例	52
6. ま と め	54
資 料	55

生き生きと動く子どもを育てる体育指導はどうあるべきか

—— 生徒が “のる” 運動をさぐる ——

1. 体育の意義

人は、運動によって心肺機能の向上、行動体力の向上という肉体的な健康のみならず、運動することによるストレスの解消により、精神的な健康も得ることができる。また、運動は感覚機能の高まりを促進し、脳への刺激を生じ発達を促すとともに社会性を養う学習の一つでもある。さらに、会得された運動への興味や技能は、音楽や美術と並び余暇の利用に役立つものである。

このように、運動は諸々の価値を内包し人が生活し成長する上で欠くことのできない「大切なもの」である。しかしながら、現在に生きる子どもたちは、彼らの生活の中でそれを十分確保しているであろうか。

— 手足を存分に伸ばし、力いっぱい走る。 — このような運動を行う空間は、増加した交通機関に奪われ、その時間は、非活動的な遊びの一つであるテレビに奪われているのが現状である。とりわけ、精神発達遅滞児は、残された空間と時間の中でもなお一層のこと、人間にとって「大切な運動」を行っていないと言いきっていいのではないだろうか。それは彼らの発達段階に沿った運動用具が準備されていないなかったり、共に運動するところの相手がいなかったりすることなどに大きな原因があると考えられる。

家庭生活において十分な運動を行っていない彼らに対して、わたしたちは、運動する時間を確保し、彼らの発達に沿った運動用具を準備してやり、共に運動する楽しさを味わわせなければならない。また、そうすることが、学校での自由時間の運動を導き、ひいては、家庭生活での運動の生活化へと広がっていくことになる。このように「大切な運動」をしない子どもたちを、運動する子どもへと変化させていく学習の中心が、教科体育であると考えるとき、その重要性を認識し、指導計画及び指導法の改善に、より一層の研究を重ねなければならない。

2. テーマ設定の理由

(1) これまでの取り組み

本校が開校されたのは昭和55年4月で、現在地に移転したのが一昨年の4月である。初めの2年間は附属中学校内での生活であった。そのため授業時間はもちろん、昼休み時間も思うようにグラウンドや体育館を使えず、体を動かす活動は十分でなかった。

開校当初は特殊学級時代の指導計画を使っていた。そこで、最初に取り掛かったのが、実態に即した小・中・高一貫をめざした指導計画作成であった。

現在の所に移転してからも養護学校の体育のあり方を模索し、初年度作った指導計画を修正しながら、走る運動を主体にバドミントン、ボールけりやボール投げ、マット運動を取り入れ、週3時間の指導をしてきた。また、朝のランニングも取り入れ体力づくりに努めてきた。

開校以来、体力や健康増進を図り、人と人とのかかわりを深め集団参加能力を向上させることに努めてきたが、指導体制の不備をはじめ、運動発達と精神発達のかかわりを考えた指導や、いろいろな

用具を組み合わせ変化に富んだ授業の展開などが十分なされなかった。したがって、生徒一人ひとりが体育の時間を待ち望み、楽しく学習するまでには至らなかった。

(2) 生徒の実態

一般に、精神発達遅滞児の運動諸機能は、体位におけると同様に、健常児よりも劣っており、この劣差は、年齢上昇に伴って増大するという傾向が示されている。そして、この劣差は、諸機能のどれにおいても一様でなく、従って各機能が、健常児同様のバランスを保ちながら発達していないという傾向も示されている。本校中学部の生徒も、その例外ではなく、全体的に見るとアンバランスな発達を示し、かつ、運動機能検査におけるMOAも、3.2歳から11.6歳と幅が大きい。自ら進んで体を動かそうとする意欲、態度に乏しく、機能的にも知的にも比較的高い水準にいる一部の生徒が、運動をいやがったり、目的に沿った運動ができなかったりすることが多く見られたりする。これらは、これまでの成長過程における運動経験不足と体を動かす楽しさを十分味わっていないことなどによるものと思われる。例えば遊びの場面では、大半の生徒が一人遊びのパターン化した状態になっており、対人関係や運動量の少ないものとなっている。自転車や四輪車等の乗り物での遊びが半数を占め、その他はボールを使った遊びや、一人で何となくぼんやりと過ごしている生徒が多く見られる。自分から友達とかかわりを求めて遊んだり、いろいろな遊具を使って楽しむ姿は少ない。また、家庭においては、ほとんどの生徒が遊び相手がなく、テレビや玩具、マンガ、音楽などで大半の時間を過ごし、運動的遊びはほとんどしていない状態である。さらに、生育歴から、遊び経験不足や、それによる対人関係、社会性の停滞も指摘される。機能的に、ある程度の力をもつ生徒が、現在までの人的・物的環境によって十分その力を出しえず、逆に体を動かすことをおっくうがる傾向も見られる。集団参加の面からみても、自己中心性の強いものが多く、気力に満ちたけじめある参加はできない。

これまでの体育時の様子を見ても、前述したような、何となく活動している姿がそのまま見られ、ほとんどの生徒が、教師の指示や援助を必要とした受身的な活動となっていた。概して、生徒たちは、ボール等を使って楽しもうとする様子はあまり見られなかった。特にボール運動では、棒立ち状態でいたり、傍観的であったりする生徒が多く、ゲームとして成立しない状態であった。当然その活動時における生徒たちは、活気に乏しく、嬉々とした表情があまり見られなかった。

(3) 中学部における体育の考え方

① 体育の重要性

ア 中学部生徒の発達段階

健康で安全な生活を営んでいくためには、基本的な生活習慣や態度を身につけることは、もちろん大切なことであるが、それ以前に、生活体としての身体の維持が必要である。この身体を維持していく力は、生涯のうちで様々に変動していくが、その中で中学部段階は著しい身体発達を示す。この時期には、身体活動、運動技能面での成長がかなり大きく、やさしいルールを理解して、簡単なゲームを楽しみ、さらに人と人とのかかわりがもて、集団での活動もより活発になるといわれている。

従って、この時期（中学部段階）に体を鍛え、体力を培うとともに、人と人とのかかわりを深め、集団参加能力を向上させることが必要である。

イ 学校教育目標，学部経営目標の具現化

人間性豊かで、家庭生活や社会生活に自立できる生徒を育成するためには、体力や気力の充実、情緒の安定を図り、公正な態度や、進んで規則を守り、協力して責任を果たすなどの能力や態度を養うことが必要である。身体活動という現実の学習を通してながら、これらの能力や態度を養うのに体育は役立っている。

ウ 身体活動と全体的発達

体を動かすことによって脳を刺激し、身体の諸機能が向上する。従って、体育指導は、精神発達遅滞児教育の基盤であると考えられる。

② 中学部のめざす体育

ア 楽しい運動

体育科の究極のねらいは、健康の増進と体力の向上を図るとともに、情緒を安定させ、健康で安全な生活を営む態度を養うことであり、そのねらいを達成するためには、まず、生徒が運動を好きになることである。好きになるためには、生徒一人ひとりの自発的活動を促進し、楽しく運動できるようにしなければならない。授業に遅れる生徒が皆無で、体育の時間を待ち望むようにしたいものである。

イ 運動の生活化

休み時間、友だちと仲良く運動する生徒であれば、体力の向上はもちろん、情緒も安定し、対人関係も好ましいものとなるだろう。体育の学習で修得したものが、休み時間はもとより、家庭で生かされるようになれば生活が楽しくなるものと考えられる。

ウ 基本的運動を重視

精神発達遅滞児は、成長の過程で彼らを取りまく環境の不備、とりわけその中でも遊びの経験不足により、質的及び量的に十分な運動を現在もすることができないようである。そこで、このような生徒たちに、

走る，跳ぶ，投げる，捕る，打つ，はう

など、基本的運動を十分させることが必要であり、それなくしては、スポーツを楽しむことはなかなかむずかしいものと考えられる。

エ 社会性の育成

一定のルールが基礎的な条件となる競争場面を導入し、成功や失敗、勝敗などの情緒的な経験（喜び、悲しみ、怒り、ルール遵守など）をさせ、きまりや秩序の意味をわからせ、スポーツを発展させるために必要な協調性、責任感を育て、集団参加能力を高めたものである。

以上のような考えを基に、生徒一人ひとりが、自分の能力を十分発揮し、運動している姿を求め、上記のようなテーマを設定した。

3. 研究の実際

(1) テーマのとらえ方

人は、生きることで学習し、その学習によって付加価値を身につけ、新たな己れとして生きていく。子どもたちは、彼らの生活そのものである遊びの中で、人間としての大切なもの — 健康はもちろんのこと、からだの発育、運動能力、体力の獲得、知的発達、仲間とのつきあい方など — を身につけていく。これは、遊びが彼らの能動的活動であるからにはほかならない。万一この遊びがみせかけのものであり、受動的なものであると仮定したら、そのような「大切なもの」は決して効率よく身につくはずがない。

能動的な活動は、遊び（学習）への意欲に内包する動機づけ、つまり子どもたちを内から揺り動かして、ある行動に向けるもの、あるいは行動に向ける状態により引き起こされる。そして、その取り組みを持続させるものが、活動の対象である人や物から受ける快い刺激や変化である。

わたしたちは、子どもたちが体育を学習する中にも、能動的に活動する姿を忘れてはならない。そうでなければ体育を学習する意義 — 体力、技能、社会性、安定した情緒など — が減少する。あるいは偏った価値しか子どもたちに残さないと考えるからである。

子どもたちが能動的に学習する姿、つまり望むべき子どもたちの学習状態を、その効率の面からとらえ、わたしたちは、彼らが生き生きと活動している状態であると考えた。生き生きとは能動的に活動していることにより、彼らが心を揺り動かされ、五感と筋肉を十分働かせ、運動を楽しんでいる状態である。このような状態をつくりだす運動を「のる運動」ととらえ、これを探っていくことにした。

仮説 — 1 —

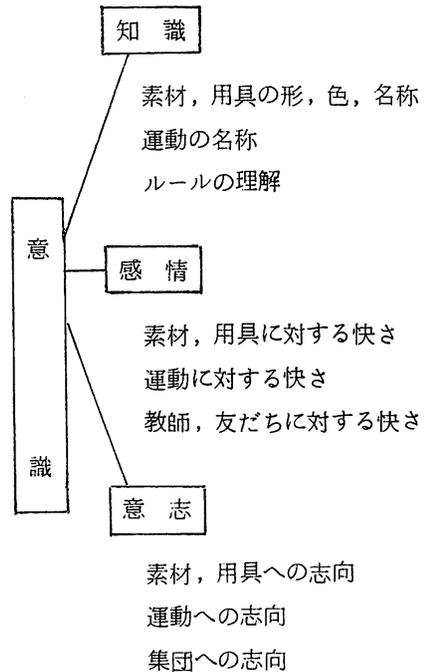
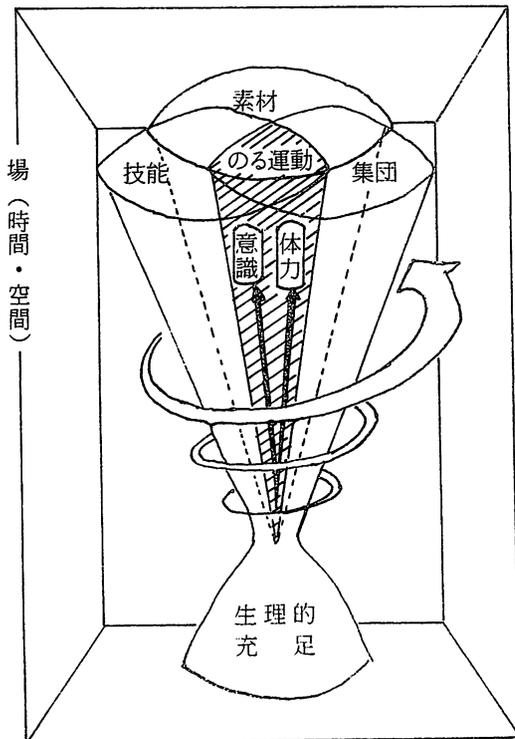
のる運動を「いっぱい」「継続」させれば、体力、運動技能はもとより、社会性が高まり情緒が安定し、生き生きとした子どもとなっていくのではないだろうか。

そこで、子どもたちの遊び（意図されない学習）、体育（意図された学習）に共通し内包されるそれらの構成要素と考えられる三つのものに着眼した。それは子ども自身もつ運動の技能であり、共に教え、教えられる教師や友だち、つまり集団であり、また、快い刺激や変化を与える運動の素材である。わたしたちは、この三つの中で、技能の的確な把握、適切な集団づくりにも配慮しながら、運動への意欲を喚起し、意識を高めていくと考えられる素材に視点をあて研究していくことにした。

仮説 — 2 —

適切な集団の中で、子ども自身のもつ技能を最大限に引き出し、運動に対する意欲や意識を向上させるためには、素材の特性を十分生かした教材、教具を開発し、運動させるべきではないだろうか。

運動による意識の向上



さて、わたしたちは、のる運動をさぐるために素材に視点を当てた。ここで素材の特性及びその特性を十分生かす条件 — 子どもたちの運動への動機づけを図り、その取り組みを持続させるもの — を立て実践に移していこうと考える。

子どもたちがのるための素材及び教材，教具の条件

- 素材に新奇さがあること。
- 快い感触があること。
- 適度の抵抗感があること。
- 適度の緊張感があること。
- 成就への見通しがあること。
- 偶然性があること。

実践に当たっては、これらの条件をより多く内包した素材及び教具に着目しなければならない。また、実践後の考察を密にし、この条件の付加、削除など見直しも行っていかなければならないだろう。

(2) 題材の設定と内容について

題材は、指導計画を構成する重要な柱であり、題材によって具体的な学習が進められるので学習指導要領に示されてある目標を達成するための内容を包含したものでなければならない。そのためには、

各運動の特性や生徒の学習能力、男女の特性、障害の程度、施設・用具、指導体制などを考慮し、また、学校行事等との関連を図って、内容や学習経験をまとめるようにしなければならない。

本校中学部の生徒は、知的能力、運動能力ともにその発達の差が著しい。そのため、配列にあたっては、実態に即した綿密な配慮が必然となってくる。

そこで、わたしたちは、生徒の実態を十分に考え、学校・学部の教育目標の具現化をめざしつつ、体育科の求める目標を達成されるように、次のようなことを配慮しながら、題材の設定を行うことにした。

ア 素材の特性を十分生かす。

生き生きと運動させるために、素材の特性を十分生かした教材・教具を準備し、指導内容を組織する。

イ 生徒の発達段階に即して、内容の程度を考慮する。

一般のスポーツでは、技能や複雑なルールが要求されるので、彼らの「のる運動」とはなり得ない。そこで、基本運動を核とし、簡単なルールを付け加えた内容としたい。

ウ 学習能力差に対応できる指導形態を取り入れる。

能力差に応じて学習活動が多様化され、個別又はグループ学習が展開されやすいようにし、対人関係の向上もあわせてねらっていけるよう組織する。

エ 生活化できるためのいろいろな経験を多くする。

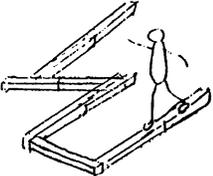
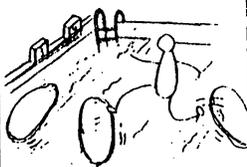
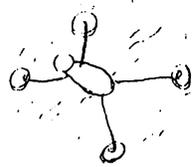
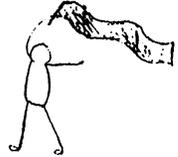
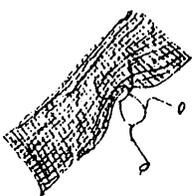
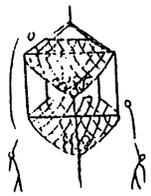
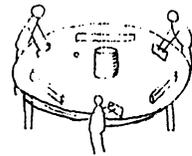
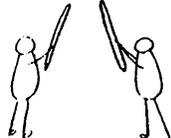
遊び経験の少なさが運動能力形成に大きく影響しているため、実態に即して生活化されやすい運動遊び的な内容を盛り込み、経験を多くさせるようにする。

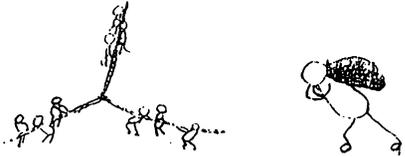
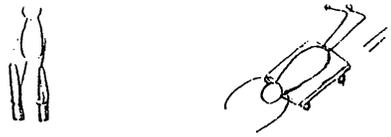
オ 他教科・領域・特別活動・施設・季節等の条件を配慮する。

以上のような考え方で、体育科の内容や指導要領の具体的内容との関連化を図り、子どもが、興味・関心を持ち、意欲的に学習できるような題材を設定し、内容を組織していきたい。

(3) 素材を生かした題材一覧表

月	題材名 (領域)	時数	主な素材及び 教材・教具	運動例	のる条件
4	集団行動 (体操) 走の運動 (陸上運動)	6	・絵カード ・笛	合図を見て(聞いて) いろいろスタート 	緊張感
5	ボールを使った 運動 (ボール運動)	8	・段ボール箱 ・紙玉	かべくずし 紙玉ホッケー 	新奇性 見通し

月	題 材 名 (領 域)	時 数	主な素材及び 教材・教具	運 動 例	のる条件
6	器械を使った運動 (器械運動)	8	・角材 ・はしご	迷路平均台  はしごのぼり 	緊張感 見通し
7	水に親しむ運動 (水 泳)	4	・発泡スチロー ル	島とび  浮きましよう 	緊張感
9	たのしいダンス (ダ ン ス)	8	・棒 ・布	棒体操  布ダンス 	新奇性
10	走・跳の運動 (陸上運動)	8	・みぞ ・あみ	みぞとび  あみくぐり 	抵抗感 緊張感 見通し
11	ボールを使った 運動 (ボール運動)	8	・あみ ・ベニヤ板	かご入れボール  ころがしピンポン 	新奇性 偶然性 見通し
12	やさしい格技 (体 操)	4	・紙 ・帯	紙剣道  帯レスリング 	新奇性 緊張感 快い感触

月	題 材 名 (領 域)	時 数	主な素材及び 教材・教具	運 動 例	のる条件
1	根 気 くら べ (体 操)	6	<ul style="list-style-type: none"> ・古タイヤ ・ロープ ・チューブ ・モップ 	タイヤ引き モップ走 	新 奇 性 快 い 感 触 抵 抗 感
2	力 くら べ (体 操)	6	<ul style="list-style-type: none"> ・つな ・軍手 ・砂袋 	三方つなひき 砂袋かつぎ 	抵 抗 感
3	乗り物を使った 運動 (体 操)	4	<ul style="list-style-type: none"> ・空きかん ・キャスター 	かんかん馬 スケーターボード 	新 奇 性 快 い 感 触 緊 張 感

(4) 帯時間と単位時間における体育指導の位置づけ

	帯 時 間	単 位 時 間
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本の運動を繰り返すことにより、体力づくりをめざす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲームを楽しむことにより、体力づくりをめざす。
時 間	<ul style="list-style-type: none"> ・ 週3時間(月～金, 毎日20分)実施し、総時数105時間を充てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 週2時間(火・金), 総時間70時間を充てる。
指 導 形 態	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一斉指導が中心となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別指導またはグループ指導が中心となるが一斉指導も行う。
学 習 方 式	<ul style="list-style-type: none"> ・ サーキットを中心とした学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゲームを中心とした学習

いずれも体育指導には変わらないが、上の表に述べたような位置づけによって指導を累積し、子どもたちのパワーアップをめざしている。

「継続は力なり」といわれるように、短時間学習でかつ継続的に指導できる「帯時間」では基本の運動を繰り返すことにより体力づくりをめざし、一方、単位時間における指導では、子どもたちのもつ基本的運動能力を生かせるスポーツを設定し、それを楽しむことによって、体力づくりをめざすのである。つまり、それぞれの長所を生かした体育指導を実践しようと考えている。

4. 実践Ⅰ 『ボール運動』の指導を通して

- (1) 題材 ボールを使った運動
- (2) 期日 昭和58年12月9日
- (3) 場所 体育館
- (4) 対象 中学部生徒全員 男子12名 女子6名 計18名
- (5) 題材について

- ① 身体的、情緒的、知能的に障害のある精神遅滞児の体育指導は、身体活動という学習を通して運動能力を伸ばし、情緒の安定を図り、社会性を豊かにし、子どもたちに健康で安全な生活を営ませるのに役立っている。

いろいろな教具を使って考えられる体育指導の中で、子どもたちの目や手に触れることが多いものにボール運動があげられる。「ボール」という遊具は、子どもにとっては与えられた遊びの用具であり、少なくともそれは、子ども自身が遊びのために見つけ出してきたり、作ったりした遊具ではない。しかし、スポーツにおいては、ボールゲーム(球技)が様々なバリエーションを創り出し、競技としての多様な展開をみせている。

ボールは、子どもたちにとって形への抵抗も少なく、動きかけに対して簡単に動く(転がる、弾む)という特性があり、投げる、打つ、ける、捕るなどの多彩な運動が展開されやすい。また、狭い所や広い所でもいろいろ工夫でき、手具を用いて生活に取り入れやすい遊具で、子どもたちの実態に即して展開されやすいという利点もあげられる。

ボールには、球型のほか変型のものもあり、弾むものや弾まないものもある。つまり、形、大きさ、重さ、構造等によって様々なボールがあり、それによって、その動き、機能が異なり、その使い方、扱い方、扱う動きが違ってくる。わたしたちは、以上のような球形、変型のボールの他、「風船」「ビーチボール」「お手玉」「シャトルコック」等の類も「ボール」としてとらえ、学習を展開しようとしている。

子どもたちの休み時間の様子を見ると、ボール運動に対する興味・関心はあるが、子どもたち同士によるボールを使った遊びは見られない。それは、経験不足や環境施設の不備もあげられるが、方法を教え、遊び合う人がいないことが原因と考えられる。

ボールを使った運動は、大きく分けて「手を使う」ものと「足を使う」ものとに分けられ、運動内容は手を使ったものの方が多彩に展開できる。子どもたちにとっては、足を使った運動よりも手を使った運動の方が平易にできるようである。

このようなことから、わたしたちは「投げる」「打つ」「捕る(止める)」の活動を多く取り入れ、実態に即したボールを使っての運動を組織し、子どもの興味・関心を喚起させ、運動量を確保し、体力(調整力)を向上させていきたい。そうすることによって、運動技能も高まるものと考えられる。

また、協調性や責任感、集団参加の仕方など社会性の育成も図り、スポーツとしての生活化が図られることを願ってこの題材を設定した。

- ② 本学部は、男子12名、女子6名、計18名で編成され、障害も多岐にわたっている。また、知能指数25～73、運動能発達指数21～82と個人の能力差も大きい。ほとんどの生徒は何らか

の指示や働きかけを必要とし、これまでは集合、整列等における動作も緩慢であった。しかし、4月からの徹底した指導が繰り返され、現在では号令のもとに各自機敏な行動がとれるようになってきている。また、様々な用具を準備したサーキットトレーニングにより、活動する生徒たちの表情にも生き生きしたものが見られるようになり、体育の時間を楽しみにしている様子も伺われる。ボール運動に関する技能やルール理解等は全体として低く、教師と一緒に活動する場面が多くなるが、自由時間における様子を見ると、「投げる」「ける」などの姿が少しずつ目につくようになってきている。

以下、生徒一人ひとりのおおよその実態を示すと次のようになる。

※ IQ…田研・田中ビネー MOQ（運動能発達指数）…半場式

項目 生徒名	学年	IQ	MOQ	SQ	ボールの扱い	ルール理解	集団参加	備考
N・S	1 (男)	49	81	88	ボールへの興味もあり、楽しんでボールを扱う。ゴロなら取れるが、フライ、バウンドはあまり取れない。けるのはうまい。	得点での優劣がわかり、楽しんで運動するが、競争心がない。自由に運動する状態が多く、ルールはあまり意識しない。	他からの働きかけがなければ、自ら相手を求めて運動することはない。指示を理解し行動に移せるが、落ちつきに欠け機敏な行動はとれない。	自閉的傾向
N・M	1 (男)	86	78	47	ボールに対する興味も高く操作もうまい。捕球はバウンドになったときまごつく。投球もけるのもうまい。	簡単なルールは大体理解できる。競争心が旺盛でルールにそって意欲的に運動する。得点での優劣がわかる。	指示をよく理解し場に合った行動がとれる。3人以上の集団の中で他に働きかけて運動し動作も機敏である。	ダウン氏症候群
N・M	1 (男)	50	76	73	ボール操作に慣れておらず、投球・捕球がうまくできない。けるのはほとんどできない。	やや複雑なルールも理解できるが技能的に劣りが連携のとれた運動ができない。競争心が弱い。	集団に喜んで参加するが、自ら働きかけることは少ない。指示がなければ、対人的な運動はほとんどしない。	アトピー性皮膚炎
I・M	1 (女)	88	57	42	ボールへの興味が高いが、捕球や投球など確実にできない。けるタイミングが合わない。	競争心はあるがルールに対する意識は低い。自由に楽しんで運動する状態である。	気分によって行動が左右され、時として集団の規律を乱す。多人数の運動では目的に合った活動ができる。	

項目 生徒名	学年	I Q	MOQ	SQ	ボールの扱い	ルール理解	集団参加	備考
Y・M	1 (女)	29	71	61	投球は力もありわりと遠くへ投げられる。ゴロの捕球はできるが、バウンド、フライはできない。横からくるボールはいけない。	勝敗は意識しているが、反則などのルールは意識していない。1対1の簡単なゲームはできるが、複数になると指示が必要である。	注意がそれて指示を理解しえずまごつくことが多い。自ら積極的に集団の中に入ることは少なく、他からの働きかけで運動することが多い。	脳炎後遺症 テタニー様 動作
A・S	2 (男)	26	63	40	捕球はできる。運動しているボールはいけない。	一人で自由に運動し、ルールはほとんど意識していない。競争心がなくゲームはたえず指示が必要である。	自分から相手に働きかけて運動することはほとんどしない。たえず指示しないと集団の中に入れない。	自閉的傾向
K・N	2 (男)	61	73	67	ボールの操作もうまく、簡単なキャッチボールくらいまでできる。けるのもうまい。	簡単なルールはほぼ完全に理解できる。競争心も旺盛である。技術的にも高い。	生徒同士3人以上で運動でき、リーダー的行動をとれるが、勝手なふるまいが多くよく集団の規律を乱す。	抗いれん 剤服用
S・E	2 (男)	39	68	70	ボールの操作に慣れており、リズムカルにボールをとったり投げたりできる。けるのもうまい。	簡単なルールは大体理解しルールに沿ってゲームを進められる。得点での優劣がわかり競争心も旺盛である。	規律ある集団参加ができ3人以上での運動ができる。リーダー的存在で他の生徒にも積極的に働きかける。	ダウン氏 症候群
T・S	2 (男)	48	29	77	タイミングが合わずうまくいけない。捕球・投球もうまくできない。	やや複雑なルールも理解できるが、思うように運動できない。競争心・得点での優劣など意識的な面は高い。	指示をよく理解し、場に合った行動がとれるが技能面の遅れから対人的な運動は困難である。	脳性マヒ 後遺症
M・T	2 (男)	41	68	79	楽しんで活動せず。投球は大体よく捕球もやさしいボールならできる。タイミングが合わずうまくいけない。	簡単なルールなら理解できる。競争心もありルールに沿って運動するが連続した活動はできない。	3人以上での運動ができ場に合った行動がとれる。他の生徒によく働きかけるが持続性がない。	自閉的傾向

以下略

- ③ そこで、本題材では、次のようなことに留意して指導にあたりたい。
- 子どもたちの実態に即した運動を導入し、「させられる運動」から「する運動」への脱皮を図れるような活動を工夫していきたい。
 - 能力に応じた指導グループを編成して個別化をめざし、ボールを媒体として、教師とのかかわり、子ども同士のかかわりを大切にしながら内容を盛りこみ、楽しい運動を展開したい。
 - 「打つ」「投げる」「ける」の運動をいろいろ工夫し、教具の開発に努めたい。
 - ボールは、大きさ・かたさ・重さなどいろいろな角度から選定し、生活に役立てるようにしたい。
 - 基本的な運動を重視し、楽しく、自発的に運動できるような活動を組織し、あわせて技能も習得されるように心がけたい。
 - 体育指導の時間だけの運動にとどまることがないように、教室の近くにボールを使ってできる運動の環境づくりに努め、生活化をめざしたい。
 - 実態に即した運動の中で、力づく、たくましい運動も取り入れ、運動量も増やし、体力づくりに寄与したい。
 - 成功や失敗、勝敗等の情緒的な経験（喜び、悲しみ、怒り他）をさせ、きまりや秩序の意味をわからせたり、得点板や審判の工夫、ゲームの工夫などをしたりして、協調性、責任感などの社会性を培いたい。
 - 他教科、領域との関連も図り、小集団や大集団でのゲームを取り入れる活動も実施したい。

(6) 目 標

- ボールを使った運動を楽しくさせることによって体力を養成する。
- 簡単なボールゲームを通して、「投げる」「打つ」「捕る」「ける」などの基本的な技能を高める。
- 健康や安全に気をつけて運動ができるようにする。

(7) 指導計画（総時数 10 時間）

時 分	1	2(本時)	3	4	5	6	7	8	9	10	
5	サーキット運動										
10											
15	かご入れボール			追いかけてボール			ゲートサッカー・フェンスゲーム				ゲ ー ム 大 会
20											
25	ピンポン型運動		バドミントン型運動		サッカー型運動						
30	<ul style="list-style-type: none"> ・ころがしピンポン ・フリーピンポン 		<ul style="list-style-type: none"> ・風船バドミントン ・ラインバドミントン ・バドミントン 		<ul style="list-style-type: none"> ・ゴルフサッカー ・円陣サッカー ・シュートサッカー 						
35	後 始 末										

(8) 本 時 (2 / 10)

① 実 態 ◎ — よくできる ○ — できる △ — 大体できる

氏名 (学年 ・ 性別)	N・M	N・M	N・S	I・M	Y・M	A・S	K・N	S・E	T・S	M・T
項目	(1 ・ 男)	(1 ・ 男)	(1 ・ 男)	(1 ・ 女)	(1 ・ 女)	(2 ・ 男)	(2 ・ 男)	(2 ・ 男)	(2 ・ 男)	(2 ・ 男)
テニスボールの投げ上げ	◎	△	△	△	△	○	◎	◎	△	◎
ピンポン玉 を打ち返す	遅いボール	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	速いボール	◎	△	◎	○	○	◎	◎	△	◎
	横への動き	◎	△	○	△	○	◎	◎	△	◎

② 目 標

- かごをねらってテニスボールを投げ入れたり、ピンポン玉を相手コートに打ち返して長く打ち合ったりすることができる。
- きまりを守って、楽しく運動することができる。

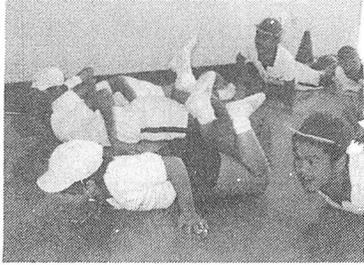
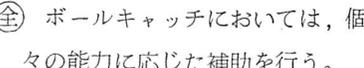
・ 各群の目標

群	学年	氏 名	各 群 の 目 標
A	1	N・M	○ テニスボールをうわ手で投げ入れたり、ピンポン玉を正確に打ち返したりすることができる。 ○ 用具の扱い方に気をつけてみんなと楽しく運動できる。
	2	K・N, S・E, M・T	
	3	K・T	
B	1	N・S, Y・M	○ テニスボールを自分の好きな投法で投げ入れたり、ピンポン玉を相手のあいている所をねらって打ち返したりすることができる。 ○ 周囲の安全に気をつけて意欲的に運動できる。
	2	F・M	
	3	M・H, M・H, S・C	
C	1	N・M, I・M	○ テニスボールを低いかごに投げ入れたり、正面に来たピンポン玉を打ち返したりすることができる。 ○ 周囲の安全に気をつけて意欲的に運動できる。
	2	A・S, T・S, Y・K	
	3	H・R, M・N	

③ 指導にあたって

生徒たちは、前時で、かごをねらってボールを投げ入れたり、ラケットで打ち返したりする活動をいっぱい行っている。本時の全体的な流れとしては前時とほとんど変わらないが、後半のボール打ちを子どもたちが意欲的にしかも楽しんで活動するためにゲームを取り入れることにした。そこでは、子どもたちの様々な実態に対応できるように、卓球台やネット、得点板などの教具に工夫をしたり、能力に応じたグループ編成をしたりして、個に応じた適切な指導がなされるようにしたい。また、サーキット運動、かご入れボール、ころがしピンポンと、大きく三つに分けられる活動場面においては、各々軽快な音楽をバックに流すことにより、子どもの動きを一層活発なものにしていきたい。そして、そこでは子どもとともに教師も活動する場を設け、人間的なかわりを深めたい。

④ 実 際

過程 (時間)	学 習 活 動			教 師 の 手 だ て	備 考	
	A 群	B 群	C 群			
導入 (10分)	1 サーキット運動をする。 <div style="text-align: center;"> ドリブル(足) ↓ あざらし ↓ 風船打ち ↓ ボールキャッチ </div>				カセット テープ ドッチボール ラケット ボール 風船 セフティー マット ③ ボールキャッチにおいては、個々の能力に応じた補助を行う。 ④ 前時の学習を想起させ、本時の学習への意欲づけを行う。	
	2 集合，整列，あいさつをする。 3 本時の学習内容を知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> • かご入れボールをしよう。 • ころがしピンポンをしよう。 </div>					
展開 (25分)	4 かご入れボールをする。 (高いかご) (高いかご) (低いかご) ○ うわ手で ○ 好きな投 ○ いろんな 投げ入れる。 法で投げ入 投げ方で入 れる。 れる。 ○ ボール集めをする。				③ できるだけ上手投げ入れるよう助言する。 ④ 意欲的に活動させるため、声かけをしたり、子どもといっしょに投げたりする。 ⑤ ボール集めがすばやくできるようにバケツをたくさん準備する。	かご テニスボール ポリバケツ

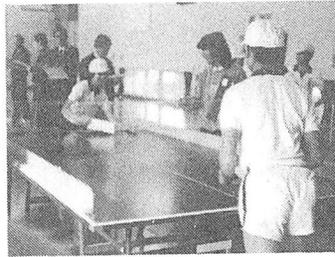
子どもの動き（見る、聞く、話す、行動、表情など）

A 群	B 群	C 群
<ul style="list-style-type: none"> ○ NMは喜んで取り組んでいる。 ○ KNは上手から打つタイミングがむずかしく、打ちながらの移動ができない。 ○ SEは風船のはね具合を調節しながら打っていく。 ○ MHはボールをしっかりとじょうずに受けとめている。 ○ 右手間隔で整列する。 ○ KNは後に話しかけたり、ぶらぶらしたりして態度が悪い。 ○ SEは上手に整列する。 ○ MHは集合動作はのろいが、きちんと並び教師の方を向き、説明をよく聞いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ MHは低い打点であるがよくできる。打つ方向が定まらない。 ○ SCは教師の補助で打っている。 ○ FMは下を向いている。 ○ NSはキョロキョロしていて静かに立っておれない。 ○ SCは教師に促されて上手に並ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ TSは喜んで取り組んでいる。 ○ MNは教師の指示がないとじっとしたままている。 ○ ASは動作は緩慢だがにこにこしながらひじを使ってはう。 ○ YKは人の3倍ぐらい時間がかかる。 ○ MNは教師に促されて並ぶ。 ○ ASは後を見ている。 ○ NMは静かに聞いていたが集中していない。 ○ AS, MNともよそ見して話を聞いていない。
<ul style="list-style-type: none"> ○ KNは“このやろう”と気合いを入れて力強く投げ入れていたが、よそ見も多い ○ SEは「ワーッ」と元気よくボールを取り、じょうずに投げボールの行方も追っている。投げた後、すぐにボールを拾っている。 ○ MNは精いっぱい投げているのか汗ばんでいる。投力が強すぎてネットをボールが越え、ほとんど入らない。 ○ NMはボールを網に投げ入れることより、力いっぱい投げることを楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ FMは下手投げて投げようと何度も手を回し試みるが、ボールは真上にしか飛ばない。 ○ NSは、ボールを取りに行こうとせず、ほとんど教師にもらっている。 ○ SCは教師に促されてボールを取りに行き投げるが、投力が弱いためほとんどかごに届かない。 ○ MHは2～3個ボールを取り上手投げて投げるが、手首だけでの投法のため確実に入らない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボール投げ入れを6回する。自分からボールをひろわず友だちからもらう(TS) ○ MNは注意されないとボールをもったままている。 ○ NMは上手投げで下段のかごをねらっているが、教師の指示による行動がほとんどである。

過程 (時間)	学 習 活 動			教 師 の 手 だ て	備 考
	A 群	B 群	C 群		
5	<p>ころがしピンポンをする。</p> <p>(三人ころがしピンポン)</p> <p>○ 中央の円柱を利用して打つ。</p> <p>○ 減点法でゲームする</p>	<p>(ころがしピンポン)</p> <p>○ 幅の狭いラケットで打つ。</p> <p>○ 加点法でゲームする。</p>	<p>(ころがしピンポン)</p> <p>○ 幅の広いラケットで打つ。</p>	<p>① いろいろなボールの動きを楽しませるため、中央の円柱をねらうよう助言する。</p> <p>② 相手のあいた所をねらって打つよう声かけをする。</p> <p>③ 長くラリーが続くように卓球台に棒をつけたり、ネットの幅を広くしたりする。</p> <p>④ 協力する場をつくるため、審判・得点係等の係をおく。さらに、役割を交替させる。</p>	<p>卓球台</p> <p>ピンポン玉</p> <p>ラケット</p> <p>得点板</p> <p>ネット</p> <p>ホイッスル</p>
	<p>手前 — 円形卓球台（自作）を使っところ がしピンポンしているA群</p> <p>後方 — ころがしピンポンしているB群・ C群</p>				
終末 (5分)	6 整理運動をする。			<p>⑤ しっかりした運動を行わせるために、ゆっくりと号令をかけたり個別指導にあたりたりする。</p> <p>⑥ 望ましい生活態度を養わせるため、各グループ毎に、各々使った用具のあとしまつをさせる。</p>	
	7 本時の反省をする。				
	8 後始末をする。				

子どもの動き（見る、聞く、話す、行動、表情など）

A 群	B 群	C 群
<ul style="list-style-type: none"> ○ NMは台の所へ走り、ラケットをすぐ取って早くやりたいようすである。KNと場所の奪い合いをするが相手に譲る。 ○ SEは勢いよく交代し、ラケットを持ち、さっと身構える。 （目玉をギョロギョロさせてどっからでもこいという感じをしている。） ○ KT, SE, NM等上手に玉を打ち返し、ゲームを楽しんでいる。教師が失敗すると大喜びをする。 ○ KNはゲームより得点係の方がよくできた。ゲーム中は相手への口出しやよそ見がとても多い。 ○ KTは意欲的にピンポンをしていてゲーム方法も理解している。やや機敏でない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ MHは得点係を終わるころほほえむ。（次は出番という喜び） ○ SCは勝ったとき、うれしそうな表情でポーズをする。 ○ FMは試合に勝つと、跳び上がって喜ぶ。試合前にまじないのような祈りをしてボールを打つ。友だちにも声援を送る。 ○ YMは喜んでピンポンをしているが、負けるとふくれ面となる。 ○ NSは自分以外の試合には関心もなさそうである。たえずあちこち見回したり、近辺をうろうろすることが多かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ MHは早くやりたくて、ラケットを握って待つ。 ○ NMは教師の誘いがあってもやる気がおこり、「ようし」と言いながらラケットをふるかっこうをする。 ○ ASは得点できると板をたたいて喜ぶ。速い球は手を動かして受けようとするが体は動かない。 ○ TSは正面にきた球は返せるが、横にくるとラケットを動かすこともなくほとんど負ける。負けてもくやしそうな表情を全く見せない。 ○ IMは、速い球でも返球がうまい。教師がわざと失敗してやると大喜びする。
<ul style="list-style-type: none"> ○ KNはみんなと一緒に協力して後始末をする。 ○ MHは自分ではどのような後始末をしてよいのか判断できず人のするのを見てから行動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ SCは後始末をせずくつ箱へ向かう。注意されて得点板をかたづける。 ○ FMは下を向き、くつ下をひっぱって教師の話を聞こうとしない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ IM, TSは喜んで後始末をしている。 ○ NMは指示なしで、残っている道具を自分から進んでかたづける。 ○ MNは、指示に対して返事はするがあとしまつをしようとしめない。



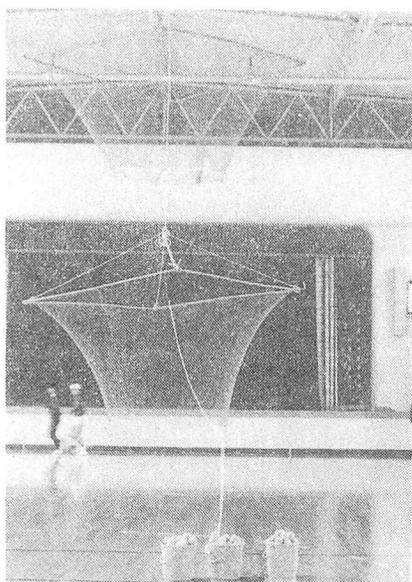
(9) 考 察

中学部は「生き生きと動く子どもを育てる教育課程の編成」の学校テーマを受け、楽しくて生活に役立つ基本運動を重視し、的確な実態把握にもとづく素材の発掘に努めながら、子どもたちが生き生きと体育の学習に参加できる“のる”運動をさぐってきた。

そこで、我々は“のる”運動の要素の一つとしてとらえている「素材」の視点に立ち、子どもたちがより生き生きと活動するために、準備した素材及び教材・教具は、“のる”ための条件が生かされかつ適切であったかを、「かご入れボール」「ころがしピンポン」の運動における実践で考察し、今後の研究に役立てていきたい。

① かご入れボール

かご入れボールは、ボールをひっかけることのおもしろさを取り入れ、主な素材である漁業用の網を効用して作り天井にぶら下げた二連のかごに、廃棄された硬式用テニスボールを下から投げ入れる運動である。



これは、ボール運動の基本的動作 — 「投げる」に関する子どもの実態に立ち、下から上へ投げる一人ひとりの運動能力を高めるために考察したものである。

天井につるされた二つの大きなかごは、子どもたちを驚かせ、投げる意欲を喚起し子どもたちの技能をカバーするのに効果的であった。また、数百個も用意したボールは、一斉にせいっぱい投げ入れ合う喜びを味わわせ、投げる運動をさせるのを大きく助長した。半透明であるかごは、視覚に訴えやすく、入った量を一見できる（目標の明確さ）良さもあった。

しかし、教師の声かけの配慮にもかかわらず、ボール捨いに夢中になったり、逆に教師や友だちが捨てやらないと動かなかったりする子どもも見られた。また、上から落ちてくるボールを怖がり、運動が鈍る子どもも数名いた。

新奇性をもかんがみた二連の高低あるかごは、高さの問題や知的に低い子どもに対しての抵抗をさらに小さくすること（例えば、自分の投げたボールが確認できない子どもに対して、入った時音の出る工夫）、また偶然性（投げたボールがたまたま入る）等が生じやすく、真剣さや緊張感が欠如した。

二連にせず、別々の場所に高さの違う二つのかごを設置した方が、より一人ひとりの実態に即し、せいっぱい見通しをもって運動できたと思われる。そうすることが、競争的な場面も設定しやすく、この運動への意欲をさらに高揚したであろうと反省させられた。

② ころがしピンポン

ころがしピンポンは、工夫されたラケットにより、卓球台を利用してピンポン玉を打ちころがす運動である。一般におこなう卓球と違う点は、球を打ちころがすところであり、ネットやラケット

・台などを工夫し、子どもの実態に即してゲームができるようにしたことである。

この運動は、かご入れボールに比べ二人以上による人とのかかわりをもちながらゲームできるところが特徴で、1チーム数人による集団も編成しやすい。そのため、意欲も喚起されやすく、対抗意識も芽ばえ運動量も増大されやすい。また、ピンポン玉を使い卓球できない子どもたちに、ころがす運動を通してラケットを用いた打ち合いの技能を体得させ、ルールに従い、自分の班やみんなが楽しく運動することにより体力づくりされることをねらいに考案したものである。

まず、見通しをもってゲームできるように、得点板（板カード式）を準備しチームや勝敗を意識させたり、台との間隔を適当にあげころがりやすいセロハン紙を張ったネットを工夫したりした。このラケットは、ベニヤ板を長方形に切り、大小三種類作成し子どもの技能に即応できるようにしたものである。

次に、能力の高い子どもへの教具として創案したのが円形卓球台であり、二人以上の集団でゲームできる利点がある。中心に円柱の固形物を据え、ピンポン玉のはね返りを生かしての条件である偶然性をねらった。子どもたちは、新奇性のあるこの教具に高い関心を示し、十分に運動してくれた。

軽くてすばやい動きをするピンポン玉の音の快さもあってか、三つの群とも予想以上に楽しく運動できたことは評価できる。しかし、能力の低い子どもへ教師がどうかかわっていき運動量を充足させるか、技能を収得した子どもたちが、どのように生活化していくか等に対する指導のあり方は、今後大いに検討していきたい。

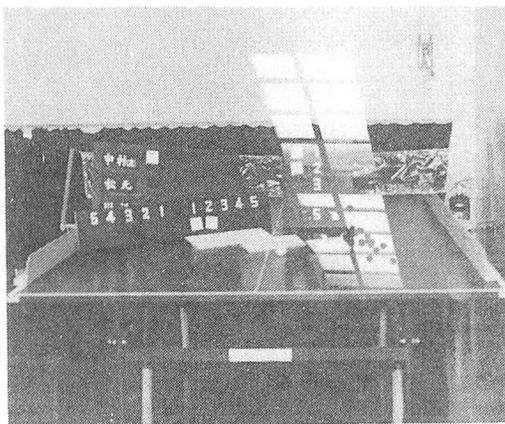
以上のことを、のるための六つの条件に照合し、整理してみると次のようになる。

- ① かご入れボール — 成就への見通し、新奇性、偶然性
- ② ころがしピンポン — 新奇性、偶然性、快い感触

この授業では、これらの条件が生徒一人ひとりの活動意欲を促すことに、大きく寄与していたと考える。

換言すれば、六つの条件を備えた素材及び教材・教具を準備してやれば、生徒がより生き生きと活動することになるのではなかろうか。

＜素材を生かした教具＞



5 実践Ⅱ 帯時間の指導例

帯時間の主なねらいは、基本の運動を継続的かつ豊富に行わせることにより、子どもたちの体力及び運動技能の向上をめざしていかうとするものである。

そこで実際の指導においては、各題材に関連のあるさまざまな基本運動の中から、その特性やねらいおよび子どもたちの教材に対する興味・関心などを考慮しながら数種類の運動を抽出しサーキット運動の形式で実施している。

ここでは、いままで実践してきた中から器機運動と体操領域の題材における帯時間の実践例を紹介する。

ア 例1（タイヤ引き）



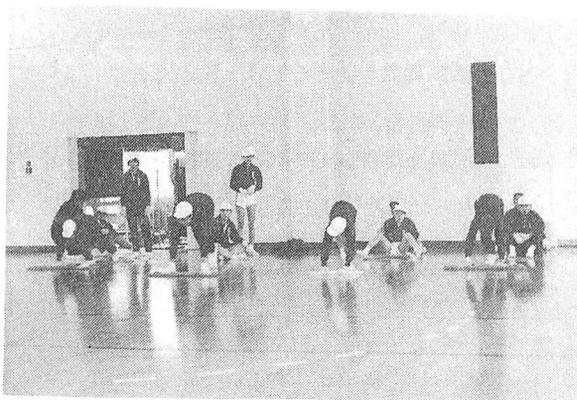
この運動は、古タイヤをロープで、引っぱり、足腰をきたえるトレーニングである。

生徒の実態に即して大きさの違う個人用タイヤを準備し、運動場のトラックを引っぱらせた。

ひもの先に自転車用古チューブで体をまとう輪をつくり、弾力性を生かして快い感触を与えるようにした。

適当な抵抗もあり、生徒たちは喜んで運動した。

イ 例2（モップ走）



これは、家庭や学校の廊下、体育館等のそうじに使われるモップを使って床ふきをする単純な運動である。

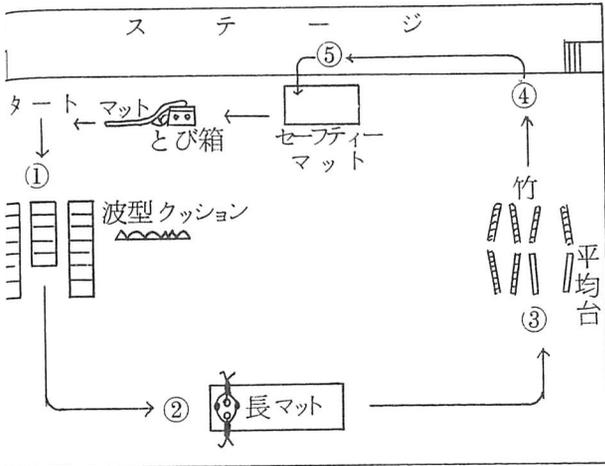
モップに床用油をつけ、床ふき運動させると、滑りもよくスピードアップされ喜んで活動した。

この運動をすると、足腰が鍛えられるのはもちろん、心肺機能も高められ、体力も増強される。

特に、子どもたちにとっては快くすべる感触が何とも言えないようである。

ウ 例3 (器械運動)

ア 器械運動におけるサーキット例(体育館)



(運 動 内 容)

- ① 波型クッションの上で前回りする。
(快い感触)
- ② 二人組で長マットの上を横回りする。
- ③ 床の上の平均台や二本の竹を開脚の姿勢で歩く。(緊張感)
- ④ ステージの上に両手をついて跳び上がる。(適度の抵抗感)
- ⑤ セフティーマットに跳び下りる。
(適度の抵抗感・緊張感)
- ⑥ 傾斜をつけたマットの上で後回りをする。(見通し)

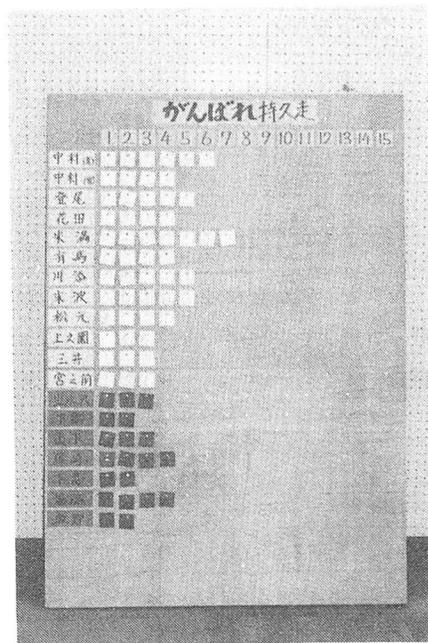
エ 例4 (校内周回走)

学校行事である校内持久走大会にむけて実施した校内周回走のトレーニングで用いたパネル板である。

変化もなくただ何回もぐるぐる校内を走る持久走に対し、見通しを持たせ、「今、何回走った」「あと何回走ると目標が達成される」などの意識を持たせるために創案した教具である。

走ってくるたびに、自分で色板を取り自分の名前のところにかけてたり、逆にはずさせたりした。増えたり、あるいは減ったりしていく自分の欄の色板を見ながら、それぞれの目標に向かって走り通そうという意識が多くの子どもたちに見られた。このことは、記録の面にも現れ、よい結果を生むことにもつながった。

周回走指導に用いたパネル板



6 ま と め

わたしたちは、運動素材 — 運動そのもの、あるいは運動するのに用いる道具等 — から受ける快い刺激を教材として生かす方向で研究をすすめてきた。そのために、子どもが“ のる ” ための素材及び教材、教具の条件を六つの視点から考え、教具を開発して授業の展開に努めている。

しかし、われわれが想定した条件は現在の浅大な研究においては、客観的な評価ができず、子どもの外面的な表情、態度からしか評価できない大きな問題をかかえている。

たしかに、子どもたちは運動への意欲は高まったようである。そのことは、素材が“ のる ” 条件を内包し適切であったのか、単に、生理的だったのかがわからないのである。ここを追求していかないと生徒の“ のる ” 運動を解明したとはいえないことを自覚して、さらに次の点について研究と実践を続けなければならないと考える。

(1) 評 価

- ① 「のる」という状態を、わたしたちは観念的にしかとらえられない状態である。もっと鋭い目で評価できないものだろうか。
- ② 「のって」、その後どのような付加価値が生徒の身につくのだろうか。もっと鋭い目で評価できないものだろうか。

(2) 指導計画の体系化

- ① 教科体育における指導計画の改善
- ② 「運動の時間」における指導計画の作成と教科体育との関連化

(3) 生活化

生活化した運動は何だろう。その逆は何だろう。なぜだろう。生活化についても、その条件について研究を深めていきたい。

以上のような残された課題を真剣に受けとめ、理論と実践が一体化される研究をめざして子どもたちがより生き生きと運動していく姿を求めていきたい。

カンカン馬が数日につぶれてしまった。困った。……竹を輪切りにしてカンカン馬、いや、ポッコポッコ馬、丈夫で快い音のするものがないだろうか。今日も、わたしたちは、七つの頭をひねりながら、さぐっているのである。

< 資 料 >

1 中学部生徒の体位 (昭和 57 ~ 58 年度) ※ 県平均 (精薄児) は、県内精薄学校 9 校による。

性別	年齢	項目		測定年度	身長 (cm)	体重 (kg)	胸囲 (cm)	座高 (cm)	ローレル指数	備考
		氏名								
男	12	県	健常児	昭57	148.0	39.8	71.0	79.5		
		平均	精薄児	昭57	142.6	36.3	68.8	77.6		被検者36名
			N・M (眞)	昭58	131.9	31.1	69.5	72.2	136	ダウン症
			N・M (雅)	昭58	155.1	43.0	77.1	84.5	116	
			N・S	昭58	148.7	34.7	70.3	79.1	105 やせている	自閉傾向
	13	県	健常児	昭57	155.5	45.6	75.0	83.2		
		平均	精薄児	昭57	148.3	39.7	71.4	80.8		被検者40名
			K・N	昭58	152.0	45.3	80.0	83.8	129	
			S・E	昭58	145.9	45.2	77.5	84.9	146 ふとっている	ダウン症
			T・S	昭58	149.6	41.6	73.6	78.0	124	
			M・T	昭58	162.5	57.0	87.6	85.1	133	
			Y・K	昭58	150.6	48.4	79.1	82.2	142	ダウン症
	14	県	健常児	昭57	161.9	51.0	78.9	86.5		
平均		精薄児	昭57	151.4	42.0	72.6	82.0		被検者40名	
		K・T	昭58	168.8	54.5	80.7	90.6	113 やせている		
		M・H (久)	昭58	167.7	51.3	81.2	92.7	109 やせている		
		M・H (裕)	昭58	154.0	49.3	80.5	84.5	135		
15	県平均 (健常児)			昭57	165.7	55.4	81.9	88.8		
		A・S	昭58	158.6	39.8	74.6	82.1	100 やせている	自閉傾向	
女	12	県	健常児	昭57	149.5	41.9	73.6	81.5		
		平均	精薄児	昭57	139.4	36.6	71.8	76.9		
			I・M	昭58	138.7	30.8	67.7	74.1	115	
			Y・M	昭58	152.4	43.0	73.2	80.6	124	
	13	県	健常児	昭57	153.2	46.2	76.7	83.3		
		平均	精薄児	昭57	142.1	39.3	73.2	78.8		被検者30名
			F・M	昭58	137.7	36.4	71.1	77.0	139	
	14	県	健常児	昭57	155.0	49.1	79.0	84.5		
		平均	精薄児	昭57	146.0	43.0	75.7	81.1		被検者31名
			S・C	昭58	136.8	44.0	78.1	79.5	172 ふとりすぎ	
			H・R	昭58	154.9	42.8	76.0	80.1	115	
			M・N	昭58	128.2	36.8	72.5	68.6	175 ふとりすぎ	

2 運動能力テスト・体力診断テスト

ア 運動能力テスト・体力診断テスト結果一覧表（昭和58年6月実施）

性別	項目 氏名 (学年)	運動能力テスト					体力診断テスト					
		50メートル走(秒)	立ち幅とび(m)	ソフトボール投げ(m)	とび越しくぐり(秒)	持ち運び走(秒)	反復横とび(点)	垂直とび(m)	背筋力(kg)	握力(kg)	伏臥上体そらし(m)	立位体前屈(m)
男子	全国平均	10.37	137.81	15.76	13.05	15.36	38.04	35.18	58.04	18.30	45.78	7.81
	N・M(真)(1)	11.5	131	15	16.0	13.8	21	△	45	10.5	△	15
	N・M(輪)(1)	11.4	77	7	18.3	14.6	25	19	33	9.0	44	-9
	N・S(1)	13.6	108	8	24.3	14.8	29	20	48	12.5	34	-9
	A・S(2)	12.4	104	7	42.6	20.0	検査不能	9	51	12.0	11	検査不能
	K・N(2)	9.8	177	29	26.0	12.3	29	37	97	22.3	48	5
	S・E(2)	11.1	146	17	20.8	15.4	27	16	60	16.8	42	14
	T・S(2)	14.0	87	10	46.5	21.3	検査不能	12	59	18.8	27	1
	M・T(2)	11.5	139	13	21.7	14.1	25	27	95	26.5	29	-8
	Y・K(2)	14.6	95	7	44.6	22.1	15	25	38	11.5	33	22
	K・T(3)	9.6	159	18	25.9	13.7	19	34	95	26.0	32	-11
	M・H(久)(3)	9.5	159	14	18.3	13.3	25	30	71	25.5	32	3
	M・H(裕)(3)	11.1	133	12	23.0	16.5	21	21	42	16.5	34	-2
女子	全国平均	10.67	129.45	9.32	14.00	15.95	36.98	33.48	47.29	16.74	46.79	10.41
	I・M(1)	12.2	99	9	21.6	15.4	23	18	33	12.0	40	-15
	Y・M(1)	9.7	131	12	23.9	13.9	17	26	63	15.5	36	-5
	F・M(2)	12.8	94	7	54.0	20.5	21	19	33	12.3	32	4
	S・C(3)	16.6	102	10	26.0	18.9	19	10	31	13.0	37	9
	H・R(3)	13.7	128	6	27.1	16.4	17	15	26	8.5	38	検査不能
	M・N(3)	19.6	55	7	42.4	21.2	検査不能	10	26	8.5	20	7

※ 全国平均は、運動能力テストが小2年生、体力診断テストが小5年生の平均

イ 運動能力テスト・体力診断テスト種目別平均値とその相当級・段階

性別	項目 平均値	運動能力テスト					体力診断テスト						
		50メートル走(秒)	立ち幅とび(m)	ソフトボール投げ(m)	とび越しくぐり(秒)	持ち運び走(秒)	反復横とび(点)	垂直とび(m)	背筋力(kg)	握力(kg)	伏臥上体そらし(m)	立位体前屈(m)	
男子	平均値	11.7	126	13	27.3	16.0	平均値	23	23	61	17	33	1
	相当級	⑨	⑦	⑧	⑩	⑦	相当段階	①	②	③	③	①	①
女子	平均値	14.1	102	8	32.5	17.7	平均値	19	16	35	12	34	0
	相当級	⑩	⑧	⑧	⑩	⑨	相当段階	①	①	②	②	①	①

3 運動機能発達検査

ア 運動機能発達検査結果一覧

領域 番号	A. 平衡機能					B. 全身運動										C. 手指の調		D. 分離模倣			MOA	MOQ
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
課題 (6~12歳)	片足あ	つま先立ち	でしまが立ち	閉眼立ち	平均台わたり	ボールけり	腕立てけんすい	四つんばい	手たたきとび	うさぎとび	まりつき	ボール捕球	両足前とび	両足横とび	棒つかみ	タッピング	指の模倣	指合わせ	握る開	片手交互に	両手ひざ打ち	
氏名 (年齢)	あげ	ち	むち	ち	たり	り	い	い	とび	とび	球	とび	とび	み	グ	倣	せ	く	に	ち		
N・M(男) (12.8)	B	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	B	A	A	C	B	B	A	A	9.4	78
N・M(男) (13.1)	A	C	A	A	A	B	A	A	A	C	B	A	B	B	A	A	A	A	A	A	9.1	76
N・S (12.3)	C	B	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	9.9	81
I・M (12.5)	C	C	A	A	A	B	C	A	A	A	C	C	B	B	B	B	A	A	C	A	6.10	57
Y・M (13.2)	A	A	A	A	A	A	C	B	A	A	B	B	B	A	B	A	C	B	A	A	8.5	71
課題 (13~16歳)	片足	つま先立ち	閉眼つま先立ち	平均台わたり	片片ひびぎ	立立万げり	腕立てけんすい	かえるとび	と腕立てよこ	あ台のり	片またり	足輪の振り	とび石とび	両足横とび	棒つかみ	タッピング	逆順の指合わせ	ひ交互の手	指中指とくすり			
氏名 (年齢)	だち	ち	ち	たり	げり	り	い	び	し	り	き	り	び	とび	み	グ	ね	ち	き			
A・S (16.1)	A	A	A	A	C	C	A	B	B	B	A	C	B	B	B	B	C	A	C	10.0	68	
K・N (13.10)	A	A	C	A	C	A	A	B	A	A	B	B	A	A	B	B	A	B	A	C	9.6	73
S・E (13.11)	C	B	B	A	C	C	A	A	B	A	A	B	A	A	C	A	A	A	A	C	8.10	68
T・S (13.6)	C	C	C	C	C	C	A	B	B	C	B	C	C	C	C	C	C	B	A	C	3.10	29
M・T (13.9)	A	A	C	A	C	B	A	B	A	A	B	B	A	A	B	B	B	B	A	C	8.10	68
Y・K (13.9)	C	C	C	A	C	C	C	B	B	A	B	C	B	B	B	B	C	B	A	C	5.2	40
F・M (13.4)	C	C	C	C	C	C	C	B	B	C	A	C	A	A	A	C	B	B	A	C	5.2	40
K・T (14.8)	C	C	C	A	C	A	B	B	A	A	B	B	A	B	B	C	A	A	A	A	9.2	65
M・H(男) (14.3)	A	A	C	A	C	A	A	A	A	A	A	B	A	B	A	B	A	A	A	C	11.5	82
M・H(女) (14.3)	A	A	C	A	C	C	B	B	B	A	B	B	B	B	B	A	A	B	A	C	8.10	63
S・C (15.3)	C	C	C	A	C	C	C	B	B	C	A	B	A	B	B	B	A	A	A	C	8.2	54
H・R (14.11)	C	C	C	B	C	C	C	B	B	B	C	C	C	B	C	B	A	B	A	C	5.11	42
M・N (15.0)	C	C	C	C	C	C	C	B	B	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	C	3.2	21

※ Aは5点, Bは3点, Cは1点を示している。

イ 領域別プロフィール

領域	素点平均	通過率平均	スコア									
			10	20	30	40	50	60	70	80	90	
a 平衡機能	14.2	56.9		•	•	•	•	•	•	•	•	•
b 全身運動	30.2	67.0				•	•	•	•	•	•	•
c 手指の協調	6.2	62.2							•	•	•	•
d 分離模倣	13.9	69.4								•	•	•

— 参 考 文 献 — 一 覧 —

文 献 名	著, 編, 訳者名	発 行 所
特殊教育諸学校学習指導要領		文 部 省
特殊教育諸学校学習指導要領解説		文 部 省
体育指導の手びき(養護学校用)		文 部 省
現代保健体育学大系「体育原理」	前川峯雄	大 修 館 書 店
現代保健体育学大系「運動生理学」	朝比奈一男, 中川巧哉	〃
精神薄弱児の体育指導	木庭修一, 斉藤義夫 植野善太郎	金 子 書 房
障害児の体育	河添邦俊, 正木健雄 矢部京之助	大 修 館 書 房
体育教材学序説	佐藤裕	黎 明 書 店
子育ての中の基礎体力づくり		文 部 省 体 育 局
育ち盛り 子育ての中の基礎体力づくり		〃
親子で楽しむ運動あそび	伊藤基記	不 昧 堂 出 版
幼児期の体育指導	遠山喜一郎, 山下博	〃
精薄児の遊びとゲーム	荘司修久	日 本 文 化 社
子どもの遊び・スポーツ百科 プレイ編	松延博ほか	大 修 館 書 店
〃 〃 ゲーム編	〃	〃
〃 〃 ボール編	〃	〃
〃 〃 ゲーム	〃	〃
ムーブメント教育 — 理論と実際 —	肥田野直ほか訳	日 本 文 化 社
精神薄弱児の機能訓練	半場正信	学 芸 図 書
障害児臨床と発達援助	野西恵三	協 同 出 版
頭のうまい使い方	山上定也	実 務 教 育 出 版
脳の話	時実利彦	岩 波 新 書
人間であること	〃	〃
月刊誌「教育心理」		日 本 文 化 社
精神薄弱児研究		日 本 文 化 社